

エンカウンター (ENCOUNTER)

第 189号

平成30年1月20日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28 山口周三

電話 080-1232-0905

<http://encounter.agape.gr.jp/>

カウマン夫人著『日の出に向かって』(1)

日本ホーリネス教団出版部発行

L・B・カウマン夫人(1868-1960)(エンカウンター第46号から再掲。)

レディー・バード・カウマン夫人は、アメリカ・アイオワ州で、銀行家の裕福な家庭に生れた。1889年(明治22年)鉄道電信技手のチャールズ・E・カウマンと結婚、1894年シカゴのムーディー聖書学院に学んだ。(モーク先生も1913年からムーディー聖書学院に学んだ。)

明治34年、チャールズと共に来日、中田重治らとともに日本の伝道ために働かれ、明治38年東洋宣教会(O.M.S.)を設立した。大正6年、東洋宣教会から、東洋宣教会ホーリネス教会が生れた。これにより日本宣教の基礎がすえられ、後任をキルボルンと中田重治に託し、ご主人の病気もあり、大正7年帰国した。(内村鑑三は、大

正7、8年、中田重治らとともに、再臨講演会を開いた。小西先生は、大正7年5月中田重治の特別伝道を聞き、6月受洗した。）

1924年（大正13年）チャールスの召された後、1928年から1949年まで、OMS（東洋宣教会）総理を務めた。東洋宣教会は、日本で発足した団体であるが、本部は、アメリカカリフォルニア州ハリウッドにおかれ、世界中の国々に宣教のクルーセードを行った。L・B・カウマン夫人は、現代で言えば、ビリー・グラハムのような活躍をした大伝道者であった。

カウマン夫人は、宣教のため、伝道者の書物、文章、詩などから編集した多くの霊想の書（内村鑑三の「一日一生」のような一日ごとに霊的な文章を編集した本）を出版した。スポルジョンから、大きな影響を受けた。次のような本が、日本で翻訳発行されている。

「荒野の泉」 福音文書刊行会、いのちのことば社 1960年

「山頂をめざして」 いのちのことば社 1963年

「荒野の泉第Ⅱ編」 日本ホーリネス教団出版部 1980年

「日の出に向かって」 〃 1986年

「谷間の泉」 〃 1994年

「慰めの泉」 〃 1997年

「潤った園のように（現代版「荒野の泉」）」 〃 1999年

この中で、「荒野の泉」と「山頂を目指して」は、ご一読をお勧めする。伝記「幻は生きつづける」（日本ホーリネス教団出版局）も、すばらしい。

『日の出に向かって』序言

『荒野の泉』を出版してから25年が過ぎました。読者の方々から頂いた多くの手紙は、私の心に大きな喜びをもたらしたとともに、『荒野の泉』の続編を書くべきだという確信を強めてくれました。

私は何年にもわたって、自分の人生を豊かにしてくれた詩歌や散文を集めました。これらを、私の人生の旅仲間である皆さんと、巡礼の道のあらゆる状況の中でともに分かち合いたく願っています。

この本の準備のためにいろいろとしらべましたが、それはとても楽しいものでした。資料を整理するために、多くの幸いな時間を費やしました。この仕事は、みなさんとわたしの主への愛からなされたものです、

もし、御恵みにより、主の愛する子供である皆さんの「日の出に向かっての旅」が幸せで容易なものになりましたら、私は自分の祈りが聞かれたと感ずることでしょう。

チャールズ・E・カウマン夫人

1月1日

イスラエルの人々は、荒野から日の出の方へ向かって旅立った。
(民数記21・11)

荒野から日の出の方向に向かった旅。この言葉自体に詩的な響きがあります。この旅人たちは、その時代の大勇士でした。彼らは栄えある新しい日、明日の日の出への希望に支えられて、不毛な荒地の夜道を旅していました。しかし、その新しい日には、夜は闇や

影と共に消え去るのです。旅人たちの希望か、はるか前にあるものに据えられていました。信仰の人は、忠実に最終目的へと続くほのかな光を追い、先駆者は比類ない勇敢さを示し、幻を持つ人は常に前に向かい、後ろを振り返りません。

新年に当たり、日の出に向かっての旅を始める私たちにとって、なんと素晴らしいはなむけでしょう。まず、ため息でなく、喜びの歌で始めましょう。なぜなら、私たちは永遠への旅人なのですから。夜が明け、栄光がとどまる地、命があふれ、尽きない永遠の春に向かって旅しているのですから。

1月3日

見よ、私たちはあなたと共にあり、あなたがどこへ行っても、あなたを守り、あなたをこの地に連れ帰るであろう。私はあなたに約束をしたことを成し遂げるまで、決してあなたを捨てない。(創世記 28・15)

神の無限の知恵、愛、力が、来たる月日のあらゆる必要を満たすと保証しています。このような事を自覚して、私達の前に置かれた一年に入って行くのは、とても喜ばしく元気づけられるものです。…私たちには、神の愛が未来のすべての必要を保証しています。このことを当たり前の一般的な真理とするだけでなく、献身的行為と信仰によって、とても尊く、具体的なものとする事ができます。神の僕たちの中で、とても用いられ尊敬されている多くの人たちは、天と父との個人的な契約に入ることができました。そしてそれは、表現することができないほどの祝福であると知りました。…私たちはいろいろ約束するかもしれませんが、神にすべてをまかせてやっていこうではありませんか。約束された年に入って行き、神の御言葉を聞こうではありませんか。

「見よ。私はあなたと共にあり、あなたを守る」。

1月5日

いと高き方の隠れ家を住み家と選ぶ者は、いつも全能の神に会うことができます。(詩篇 91・1)

S・D・ゴードンは、次のように言いました。

「イエスは、常に御父の臨在を意識しておられた。そして彼にとって最も自然なことは、御父に話しかけることだった。彼らは常に言葉をかわせる距離におられ、いつも言葉をかわされた」。

…祈りとは、旅人たちが祝福を引き出すための比類ない備えなので。祈りの中で私たちは、自らを神の目的の標準に合わせます。

祈りはとても簡単

それは、ドアを静かにあけて

まさに神の御前にそっと出ること

そこにある静けさの中で

神の御声を聞く

あるいは、ただの嘆願かもしれない

または、ただ聞くだけなのかもしれない

そんなことは問題ではない

ただ、神の御前に入ること

それが祈りなのだ

1月6日

わたしは、むかし年若かった時も、年老いた今も、正しい人が
捨てられ、あるいはその子孫が食物を請いあるくのを見たこと
がない(詩篇 37・25)

旅立つものは誰でも、当然次のように思うことでしょう。「距離は
どのくらいだろう。私は耐えられるだろうか。どうやって、その道
を行こうか」。神の道を歩むとき、絶えることのない力が与えられる
のが旅人の特権です。旅人の靴は荒れ果てた道の証ですが、神の力
強い御手が、長旅に疲れた弱い足を運びます。

新しい年の入り口にわれらは再び立つ

1年を終えるまでに

いかなる喜び、励ましが

また、いかなる悲しみ、苦しみが訪れるか

我らは知らない

だが、我らは、このことに安らぐ

神のみが知りたもう知恵で

我らの上になされることは

最善であるということ

トマス・ウィーリング

1月8日

だれでもわたしについてきたいと思うなら、自分を捨て、日々自分の十字架を負うて、わたしに従ってきなさい。(ルカ9・23)

現に、私たちが負う神からの十字架には、いつも特別な恵みと最終的な慰めがともないます。なぜなら、十字架を負わされる時、私たちは神の御手を認めるからです。しかし、思いわずらいから造られた十字架は、神の摂理とは何の関係もありません。そのような十字架には恵がないばかりか、不信仰な心が恵を阻むのです。だからすべてが困難で理解しがたく、暗黒で無力に思え、心には失意、混乱、あきらめしか見いだせないのです。すべてこれらは、神への信頼からではなく、隠れたことを詮索するから起こるのです。「一日の苦労はその日一日だけで充分である」と主は言われました。私たちが労苦を神に委ねるならば、一日の労苦も快いものになります。

自分の十字架を分かろうとか

自分の道を知ろうとか思わない

暗黒の中で、ただ、あなたの御手を感じ、

そして、あなたに従う方が良い

1月9日

どうか、主があなたを増し加え、あなた方と、あなた方の子孫
とを増し加えられるように。(詩篇 115・14)

あなたは、まだ知らぬ日々の門口に立っている

あなたは、案内も、地図もない道に立っている

しかし、あなたの救い主、守り手、友なる神御自身が共に居られる

そして、神は最後まであなたを捨てず、見放されない

あなたは立ち、「これから、どんなことがあるのですか」と尋ねる

神はあなたに答えられる

「祝福がある！そう、祝福につぐ祝福である」

その祝福がどのような形をとるか

あなたは知らない

しかし、神は祝福につぐ、祝福を与えようと備えておられる

私たちは、旅全体のために準備するには及ばない。ただ、一度に一

歩つつ用意すればよい。

1月16日

私は静かな声を聞いた。(ヨブ4・16)

ジョージ・フォックスは、日記の初めに、次のように書いています。「私は、戸外の寂しい所を、何日も歩いたりした。そしてしばしば、聖書を手にして、寂しい場所で夜が来るまで座っていた」。そのような寂しい場所だったからこそ、彼は大発見をしました。「そこで語りかけられるひとりのお方、キリストがおられた」。

静まって落ち着き、神の声を聞きなさい。静かに待ち望みなさい。

神は静けさを深く愛しておられるのに違いない

日の出や日没の静けさを

神は静けさを深く愛しておられるのに違いない

沈黙への勧めを聞いてから

私たちは語りだそうではないか

メイビス・C・バーネット

沈黙の学課を卒業したもののこそ、賢い人である。

1月24日

わたしはあなたをあがなった。わたしはあなたの名を呼んだ。
あなたはわたしのものだ。(イザヤ 43・1)

主よ、私は太陽の上る朝が大好きです

鳥は喜ばしく歌い

草は露でぬれ

世界は命にあふれ

すべてがこう祈っているようです

「あなたは私たちを暗き中で守られました

父よ、この日もお守りください」

朝はいつも私にあの時のことを

思い出させてくれます

私が救主に出会い

主が私に触れて

私を全き者にして下さったあの時を

それはわたしの魂の日の出でした

自分の家、すなわち自分の魂を掃除し終えた時は、いつでもお客を
待ち望む。

1月25日

私はどんな境遇にあっても、その中で満足します。たとえ満足するものがなくても、その中で満足せよ。(ピリピ4・11)

最悪の悩みの洪水の中でも、どこかに満足に足をおける乾いた場所がいつもあるものです。もしその場所がなかったら、泳ぐことを学んだらよいのです。そうすればどんな状況の下でも、満足することを学べます。

吹きすさぶ嵐の中で強く櫛の樹は育ち、
雲の下で安らかに花は眠る
農夫の暖炉は、冷たい風が吹き始めるまで
決して暖かくはならない

ヨシュア・ギルバート・ホーランド

自分に起こるどんなことにも耐えられなければ、だれも安全だとは言えません。クリスチャンは、それ以上に安全な立場に入ります。なぜなら、自分に起こるどんなことをも利用することができるからです。クリスチャンには、すべてのことが益になります。

1月31日

雲が幕屋の上からのぼる時、イスラエルの人々は道に進んだ。
(出エジプト 40・36)

私達がきた道は閉じられ、戻れないように守られている

神は私たちが進むと、後ろを閉じて下さる

心はなお、捨ててきたものにしがみつく

しかし、神は言われる

「前へ！前進し、成長すべきだ」

私たちは後ろの柵をやぶって

親しい者、思い出の日々を

回想しようとするかもしれない

しかし、それは死んだつまらないもので

感覚を楽しませるだけだとわかる…

道はなお、続く

これは、神が私たちが歩むために開いて下さる一方通行の道だ

どんな転向も、逸脱も致命的となる

私達の輝く未来は、常に前進あるのみだ

クラレンス・エドウィン・フリン

最初も大切ですが、重要なのは最後である